

文庫本の主題範囲

今 村 成 夫

要旨

文庫本というメディアの特性に関する調査の一環として、どのような主題の出版物が多く含まれているか、主題の分布について調査をおこなった。書誌データベースを対象に、文庫本の実題範囲を、図書館で用いられる日本十進分類法の分類区分を手がかりに調べた。過去におこなった新書本に関する調査の結果では、図書全般の実題分布と大きな違いはみられなかったが、文庫本の場合には、芸術や文学を主題とする図書が多く、特徴的な主題の分布となった。特段の経時（経年）的な変化はみられないことも判明した。

1. はじめに

図書の中で、B 5 判、B 4 判、菊判、A 4 判などのサイズを代表とする、いわゆる単行書と、より小型の新書本、文庫本などは、メディアという観点から、異なる性質を有するものであるのか。相違は無いのか。

新書本や文庫本は、価格が廉価で、単行書にくらべてサイズも小さく、携帯にも便利である。総ページ数（つまりは総文字数）は単行書にくらべて少なく、読み通しがしやすいことなども特徴であるといえる。さらに、小規模であることはまた、一般の単行書にくらべタイムラグの少ない出版・流通が可能であり、そのために何らかのあたらしい主題、現代社会のあらたな課題など、社会におけるトピックを機に臨んで取り上げ、論述する場としても有

利であろうと考えられる。紙を利用したメディアの中で、もっともタイムラグが少ないものは逐次刊行物、とりわけ雑誌や新聞であるが、新書本や文庫本は、図書の中では、雑誌や新聞の記事に次いでタイムラグが短いメディアであるといえる。そのため、新書本や文庫本を通じて伝達される情報も、いわゆる単行書とは異なる可能性がある。実際、書店店頭に平積みされている新書本の多くは、社会における新しい話題のものが中心であるようにも見える。

前報文²⁾において、新書本のこうした役割・機能について考察するため、新書本ではもっとも歴史の古いシリーズのひとつである、岩波書店刊の岩波新書、さらに中公新書、講談社現代新書等を例に、その造本の概要と主題の分布概要についてしらべた。また、同様に前報文²⁾において、新書本の主題を日本十進分類法(NDC)の分類体系を基準に調べ、単行書を含むすべての図書の主題分布と比較をおこなった。その結果、新書本については、単行書と比べて、サイズが小さく、全体の文章量(文字数)が単行書にくらべて少ないほかには、造本上の大きな相違点は見当たらなかった。また、主題の分布は、図書全体の主題の分布と大きな相違が無いことも明らかになった。

それでは、文庫本と呼ばれるよりサイズの小さい図書ではどうであろうか。こちらについては、新書本よりもさらに小型であるため、出版によるタイムラグはより小さくなるものと推測される。しかし、新書本のように、現代社会において注目を浴びているカレントな、新しい主題が多くとりあげられているといった印象は薄い。むしろ、社会科学や人文科学分野を中心とし、書き下ろし、過去からの名作、評価の高い図書、ベストセラー本などの普及版(廉価版?)として、文庫サイズで出版している例も少なくないという印象を受ける。一般の単行書と同様の主題範囲の新書本と、文庫本とでは、メディアとしての役割も異なる可能性がある。

岩野裕一³⁾は、文庫本について、その著書の中で、既刊の辞典や論文等に見られる用語の定義、出版現場の内情、形状などをもとに、その定義を試みている。

岩野³⁾は、1970年代前半期以前の文庫本に対する、他者による定義に共通する特徴を、以下のようにまとめている。

1. 廉価普及を目的とする【価格に関して】
2. 古典的名著や定評のある既刊の著作をおさめる【内容に関して】
3. A 6判など携帯に便利な小型の形態をとる【形状に関して】

一方、岩野³⁾は、鈴木徳三⁴⁾による以下の定義を引用し、現状からみて「要を得た」定義であると評価している。

- (1) 小型本。ただし、所謂豆本の類は除く。
- (2) 一般に市販され、流通機構にのせられた刊行物（限定版は除く）
- (3) 同一の出版企画による叢書・シリーズの類。
 - ①編集方針が一貫している。
 - ②造本形式が同一、または同類と思われるもの。
 - ③同一出版者（社）による刊行物。ただし権利移譲の場合も含む。
 - ④叢書名が付与されているのが普通であるが、ない場合でも共通に通用する呼称が一般化されているもの。

岩野³⁾は、鈴木徳三⁴⁾による上記の定義と、従来からの多くの定義とを比べ、「古典的名著や定評のある既刊の著作をおさめる」という“条件”が削除されている点が、現代（1970年代後半以降）の文庫本の定義として「要を得たものとなっている」と述べている。

文庫本の機能も、時代によって変化しつつあることを指摘しているものと考えられるが、現代の文庫本は、新書本と同様のメディアであって、異なる点は、サイズの相違（すなわち、携帯性と文字数の多少の相違）だけであるのか。それとも、伝達される情報が異なるのか。こうした点について実際に定量的に調査をおこなっている例は見当たらない。

本報告では、文庫本の主題分布について調べ、図書全体の主題分布や、新書本の主題分布との比較をおこなった。

2. 前報文¹⁾ ²⁾ の概要： 新書本4種類の出版状況の調査

岩波新書（岩波書店）、中公新書（中央公論社）、講談社現代新書（講談社）、文庫クセジュ（白水社）の4シリーズを対象に調査をおこなった。調査には、オンライン型全国書誌データベースを利用した。

4つの新書本シリーズの主題分布は、多少の違いはあるものの、おおまかに見るならば、その傾向は類似している。4つの出版社間では、出版された新書本の主題範囲の傾向には、おおきな違いは認められなかった。このことは、全図書の子題分布に対する調査結果と同様であった。新書本であっても、単行本であっても、主題の範囲と分布には、全体的に見て大きな違いはないものと思われる。

いずれの新書本シリーズの分布も、日本十進分類法（NDC）における3類（社会科学分野）、7類（芸術）、9類（文学）などの主題の著作物が多い。なお、講談社現代新書では、さらに2類（地理、歴史、伝記、紀行）の資料が一時期（戦後直後）に多く見られた。逆に、4、5類の科学技術分野や8類の言語分野は、他の分野に比べれば、いずれの新書本シリーズでも相対的には、発行点数が少ないようである。図書全体では、5類（技術）にもピークがみられたが、調査をおこなった新書本シリーズでは、5類は少ないことが示された。

3. 文庫本に対する調査

全国書誌の商用データベースである、BOOK PLUS（日外アソシエーツ）を利用した。同データベースは、昭和2年（1927年）以降に国内で出版された図書に関する情報約340万件（2015年9月現在）を収録している。

検索は、以下の条件でおこなった。

キーワードフィールド： *文庫*（*は、トランケーション）

分類フィールド： 0*、1*、2*、3*、4*、5*、6*、7*、8*、9*、
〔順次置き換えて入力。なお、*はトランケーション〕

期間フィールド： 1945 - 1954、1955 - 1964、1965 - 1974、
1975 - 1984、1985 - 1994、1995 - 2004、
2005 - 2014〔順次置き換えて入力〕

ここで、分類フィールドの0*、1*、……9*の各検索キーは、NDC（日本十進分類法）における類目を表している。トランケーション（*）を付けることで、各類に属するすべての区分が付与されたレコードが検索される。（例： 0* …… 000～099）

期間フィールドへは、1945年以降10年ごとの期間を入力した。このフィールドは、年月日で入力をおこなう書式となっていることから、実際には、1945年1月1日～1954年12月31日のように入力をおこなった。10年ごととした理由は、「十年ひと昔」の喩えのとおり、経験的に10年程度で社会の様相が移り変わってきた傾向があるためである。

キーワードフィールドへ*文庫*のようにトランケーションの条件で入力をおこなったが、本来は、シリーズ名フィールドへの入力が望ましい。しかし、同データベースには、シリーズ名のフィールドは見られない（他のデータベースについても、現時点では、シリーズ名で検索が可能なものは、一部の販売書誌データベースなどに限られている）。キーワードのフィールドで検索をおこなってみたところ、シリーズ名に文庫が含まれるものも検索されることが確認された。タイトルフィールドへ同様に入力した場合にも、同じくシリーズ名に文庫が含まれるものも検索されたが、検索結果の違いを確認したところ、全期間を対象に検索をしたところ、ヒット件数に8580件の差がみられた。そして、キーワードフィールドへ*文庫*と入力をして検索をおこなった結果には、シリーズ名に文庫の表記の無いものも検索されていることが判明した。キーワードフィールドを用いた場合には、同データベースの特色である解題のフィールド等も検索対象となるものと思料された。これにより網羅性が高まるものと考えられることから、キーワードフィールドを用いることとした。

表 1. 日本十進分類法における主題区分⁵⁾

0類	……総記（図書館、図書、百科事典、一般論文集、逐次刊行物、団体、ジャーナリズム、叢書）
1類	……哲学（哲学、心理学、倫理学、宗教）
2類	……歴史（歴史、伝記、地理）
3類	……社会科学（政治、法律、経済、統計、社会、教育、風俗習慣、国防）
4類	……自然科学（数学、理学、医学）
5類	……技術（工学、工業、家政学）
6類	……産業（農林水産業、商業、運輸、通信）
7類	……芸術（美術、音楽、演劇、スポーツ、諸芸、娯楽）
8類	……言語
9類	……文学

なお、この方法で検索をおこなうと、「文庫本はなぜ読まれるのか」のように、文庫本シリーズそのものではなく、文庫本について記された単行書もヒット件数に含まれることとなる。しかし、そうした内容の図書の存在は、経験的にもそれほど多くはない。試みに、“文庫本*”および“文庫の*”“文庫は*”で全期間（1927年から現在まで）を対象に検索をおこなったところ、それぞれ、425件、341件、256件（2015年9月の時点）となった。全期間を対象に、キーワードフィールド＝“*文庫*”として検索した場合のヒット件数総数は、250192件であった。総ヒット件数に比べ十分に少ない件数であることが確認された。コンピュータ検索につきものであるノイズやモレを考慮すれば、比較上大きな影響はないとみなすことができる。

4. 文庫本の分野別出版状況

六

前節に記した検索方法で検索された件数を、表2および図1に示した。全期間を通じて、2類（歴史、伝記、地理、紀行、地誌）、7類（芸術、スポーツ、諸芸、娯楽）および9類（文学）の出版点数がもっとも多い。9類の点数は、とりわけ大きい。

表 2. 文庫本の時期別・分野別出版件数

	総記	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類
1927 - 現在	3209	2961	4357	4097	1684	1544	986	13532	679	28530
1945 - 1954	113	434	229	627	286	132	159	236	86	3537
1955 - 1964	225	286	293	333	129	370	97	259	168	2620
1965 - 1974	216	232	354	454	283	96	88	138	39	1651
1975 - 1984	656	593	1138	1072	389	400	214	1814	154	9361
1985 - 1994	647	493	941	594	163	214	130	1341	53	4838
1995 - 2004	590	435	712	575	214	182	182	8526	103	4139
2005 - 2014	272	86	243	121	52	41	23	1024	21	797

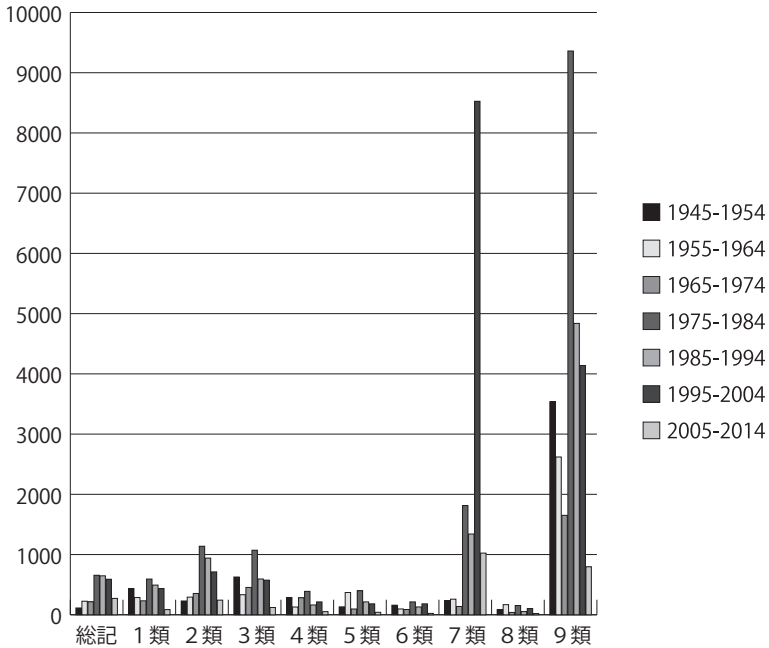


図 1. 文庫本の時期別・分野別出版件数

一方、科学技術系および産業（4～6類）関係は、点数が少ない。また、科学技術や産業に比べれば点数は多いものの、1類（哲学、論理学、倫理学、宗教）および8類（言語）が少ない。

なお、2類と3類および9類については、1970年代から80年代の出版点数が多い。とりわけ、9類（文学）は、この期間に多くの出版点数が見られる。7類については、上記1970年代から80年代の期間と同時に、1990年代の出版点数が多いという特徴が見られた。参考までに表2の最上段に、今回利用した書誌データベースの収録期間全体での出版点数を示した。2、3、7、および9類の出版点数が全体的に高い。

5. 出版点数から見た文庫本と新書本

今回調査をおこなった、文庫本の時期別の主題別点数では、2類（歴史、伝記、地理、地誌、紀行）と、7類（芸術、スポーツ、趣味、娯楽）および9類（文学）の点数が全体を通じて多く、中でも、9類の点数が他の類に比べて顕著に多いことがわかった。

一方で、1類（哲学、論理学、倫理学、心理学、宗教）に関する図書の点数は少なかった。この点は、岩波文庫などの経験的な印象とは隔たっており、意外であった。このことから、文庫本は、主題については、7類および9類の出版点数が圧倒的に多く、中でも9類は、すべての時期を通じて多いといえる。これは、第1節に記した岩野³⁾や鈴木⁴⁾の定義、すなわち、古典的名著や定評のある既刊の著作をおさめたシリーズ本で、そうした名著を携帯性の良い形態で、しかも廉価に提供するメディアであるという定義と矛盾しない。

なお、1970年～1980年代、および1990年代に7類（芸術、スポーツ、趣味、娯楽）に関する文庫本が多いという傾向については、その理由が明確にはわからないが、1980年代は、オイルショックから日本経済が立ち直り、再び高度経済成長期を迎えていた。1990年前後は、バブル経済の時期にあたっている。当時、カルチャースクールが流行し、博物館、美術館、音楽ホールなども各地に建設された時期でもあった。名画が高値で取引され、話題となったこともあったと記憶している。こうした東西地域の名画などをフルカラーで掲載し、解説した文庫本なども出版されていた。芸術活動等への注目が集まり、こうした主題分野の文庫本が多く出版されたことも、この時期に

7類の文庫本が多く出版されている理由の一つであるかも知れない。

つづいて、前報²⁾で調査をおこなった単行書を含める全図書の傾向や、新書における傾向と比較をする。図2に、前報²⁾で調査対象とし、もっとも歴史的にも古く、代表的な新書本である、岩波新書の主題別点数を示した。また、図3に、同様に全図書（単行書、新書、文庫等）の主題別点数を示した。

岩波新書の場合、時期により変動が見られるものの、1類から4類、5類、7類、9類の出版点数が多い。もっとも出版点数が多いのは、3類、次いで、2類、4類、9類、1類の順になっている。他の新書3種類については、ここでは示さないが、2類、3類、4類、7類、9類の出版点数が多かった。多い順序はシリーズにより、時期により多少変わるものの、主題の範囲は、ほぼ同様であった。

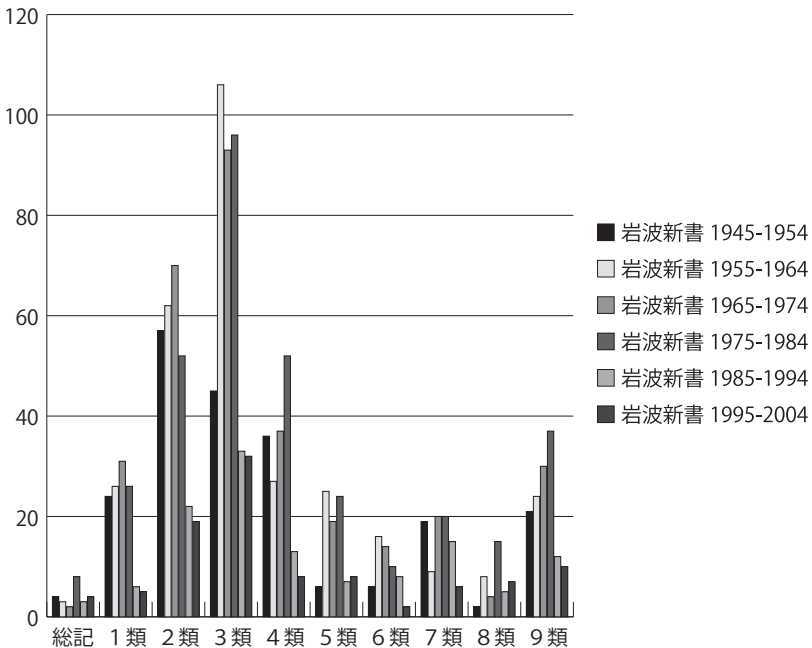


図2. 岩波新書の主題別点数（前報²⁾の結果をもとに再作成）

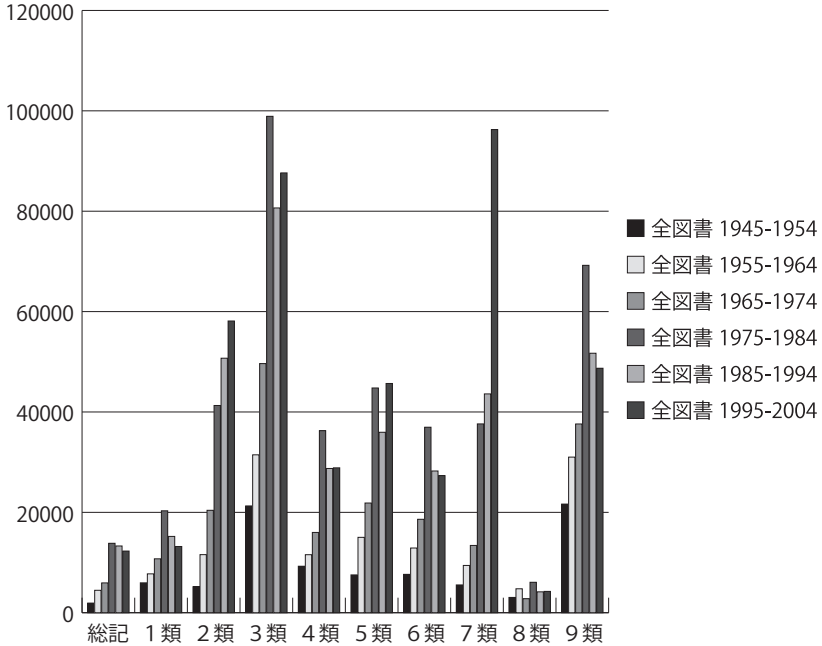


図3. 全図書の主題別点数 (前報²⁾の結果をもとに再作成)

一方、図書全体を対象とした場合には、2類、3類、7類、9類の出版点数が多く、もっとも出版点数が多い類は、3類、次いで7類、9類、2類の順であった。また、4類（自然科学）、5類（技術、工学）、6類（産業）も2類に次いで出版点数が多い傾向にあった。

これに対して、文庫本では、7類および9類の出版点数が圧倒的に多く、中でも9類は、すべての期間を通じて多い。文庫本は、文学作品が中心であることが確認できた。このことも、第1節に記した岩野³⁾や鈴木⁴⁾の定義と矛盾しない。主題範囲とそれらの分布から見るかぎりでは、文庫本は、文学論や文学作品などを掲載し、主にこうした情報を伝達しているメディアであると見なすことができる。鈴木⁴⁾は、文庫本の定義の中に「一般に市販され、流通機構にのせられた刊行物（限定版は除く）」と記しているが、そこに同

時に記された、古くからの名著等ですでに発刊から一定の時間を経過し、定評のある文学作品を中心に人文科学系の作品を収録した、小型・廉価の形式の図書という定義にも、今回の結果は符号している。経験的にも、著名な作家や文学者の作品が多い印象を受けるが、そうした点が主題面でも数量的に裏付けられた。

一方、新書本については、同様に小型で携帯性が高く、廉価の形式の出版物でありながら、収録している作品の主題は、前報²⁾で明らかになったとおり、むしろ社会科学系の知識が中心で、中でも岩波新書の場合には、自然科学・技術・産業などの科学技術系の主題の知識をも多く伝達している。今回の調査の対象にはしていないが、講談社ブルーバックスシリーズなどは、科学技術分野の主題が中心である。新書本と文庫本とは形態的にも、また書店店頭での配置場所なども類似してはいても、やや性格の異なる出版物であることが、これらの結果から類推される。図書全体の主題の分布との比較でも、前報²⁾の結果では、新書本の主題の分布は、図書全体の主題の分布と類似していたが、文庫本については、今回の結果のとおり、かなり異なる分布をしており、図書の中では、やや特徴的な性質を有していることが確かめられた。

ではなぜ、文庫本では、このように文学・文芸分野の主題が出版物の中心となっているのであろうか。文庫本の有するメディアとしての特性のどのような点により、こうした特徴が生じているのか。

前述の著書において岩野³⁾は、明治期に現在の文庫本の原型とも言うべき叢書が発刊されたのち、第二次世界大戦前後を通じて、出版界に文庫本ブームが繰り返し起こっていることを指摘している。第二次世界大戦後にも、少なくとも4回のブームが見られ、新潮文庫、角川文庫、岩波文庫などを中心に多くの文庫が創刊され、ブームが生じてきた。それらの中には、人気文芸作家による推理小説ブームや、角川文庫に見られる映画制作とのタイアップ戦略、書店によるおすすめ本展示とそのベストセラー化が含まれる。近年では、ライトノベルズの文庫本への進出も見られる。そうしたブームの中心には、文芸作品が多い。文庫本は、文芸作品を収録したメディアであるといった認識がこうした中で定着してきているのではないか。

6. 主題の分布から見た文庫本の特徴

今回の調査により、文庫本は、文学・文芸および芸術に関する知識、とりわけ文学・文芸を中心とする主題の作品を伝達するメディアとして出版がおこなわれてきていることが示された。そして、こうした主題分布の特徴は、図書全般の主題範囲分布や、さらには、文庫本と類似したメディアである新書本とも異なっていることも示すことができた。

しかし、文学・文芸あるいは芸術の主題内で、さらにどのような領域の知識が多く含まれているのか、より細かい主題分布や、伝達される情報の新旧（タイムラグ）、情報の形式（文字、数値、画像などの形式）については、さらに調査が必要である。

7. おわりに

今後は、文庫本・新書本それぞれを対象に、より具体的な造本、主題、主題のレベルや質、文章表現のレベル、情報の形式、読者層などについても調査をおこないたい。

引用文献・参考文献

- 1) 「新書本における造本および主題の変容：岩波新書を例に」。今村成夫。大正大学研究紀要。94号。p.252-243, 2008.
- 2) 「新書本の主題範囲」。今村成夫。大正大学研究紀要。99号。p.326-313, 2013.
- 3) 「文庫本はなぜ読まれるのか：文庫の歴史と現在そして近未来」。岩野裕一。出版メディアパル。2012.
- 4) 「明治期における文庫本考（二）」。鈴木徳三。大妻女子大学文学部紀要。第13号。1981.
- 5) 「日本十進分類法 第9版」日本図書館協会分類委員会。日本図書館協会。1995.

- 6) “情報フォルダー：マガジンハウス文庫と小学館 101 新書が創刊”。朝日新聞 2008 年 9 月 14 日 朝刊. 読書 3 面
- 7) 「岩波新書の 50 年」. 岩波書店編集部編. 岩波書店, 1988 (岩波新書;別冊)
- 8) 「出版の検証：敗戦から現在まで」. 日本出版学会編. 文科通信社, 1996.
- 9) 「大学図書館と新書本」. 吉田昭. 大学図書館研究, v.38, 1991.
- 10) 「圧倒的に多い文庫本利用（学校図書館の外側にあるもの：本・新書本・マンガ・etc.）」. 特集：学校図書館の外側にあるもの. 安光哲来. 学校図書館, v.323, p.26~28, 1977.
- 11) 「利用の多い文庫本（学校図書館の外側にあるもの：本・新書本・マンガ・etc.）」. 特集：学校図書館の外側にあるもの. 細山田文樹. 学校図書館, v.323, p.32, 1977.
- 12) 「出版状況クロニクル」. 小田光雄. 論創社. 2010.
- 13) 「文庫本概念と歴史」. 布川角左衛門. 学校図書館. 通巻 289 号, p .21-23